

チームけせんの和 だより

2017
vol.13
3月号

発行 陸前高田の在宅療養を支える会（チームけせんの和）

〒029-2205 岩手県陸前高田市高田町字鳴石42-5 TEL 0192-54-2111 FAX 0192-55-6118

「劇団ばば☆」に参加して

平成歯科医院 院長 村上 恵一

一昨年の秋、チームけせんの和「劇団ばば☆」の第2弾目となる演目「健康長寿はお口から」の初公演を、コミュニティホールで開催された「健康のつどい」のステージで行いました。

小学校以来の演劇ではありましたが、役を演じる大変さをしみじみ感じ取りました。発端は、親睦を深める為に劇に参加して頂ければとの事でみなさん軽い気持ちでお受けになったようです。ところが蓋を開けてみたら、さあ何から始めようか！むむ～。歯科医師団の集会時に、先づはシナリオの作成を吉田裕先生にお任せしました。作成には大変苦勞されたようです。何度も何度もスタッフの意見も取り入れながらの編集でした。

今回のタイトルは「健康長寿はお口から」となりました。毎年市の歯科保健推進協議会で問題になっております乳幼児のう歯率が全国的にも高く、また、う歯や歯周病菌により全身疾患の要因になる事をみなさんご承知していませんでした。その事を踏まえながら面白おかしく演劇に取り入れました。

次は配役。こちらはすんなり決まり！？私は、お湯の水博士と歯科医師の役。シナリオを見たらセリフが多い…。ただでさえ小さい頃から物覚えが悪い上に滑舌が良くないのに～。いくら覚えてもセリフが抜けていくでわないか。どないしよう。悩んでいたら救世主行本さんが「前の先生カルテを見るフリして台本読んでましたよー。」助かったー！！（涙）。そして最後のセリフ「こりゃひで～わ！」でのシェーのポーズ。スジがいったみたいで、後にも先にもこんな筋肉痛はありませんでした。

という事で、皆さんのおかげをもちましてシンガポールホールでの演劇は無事終了いたしました。いやはやご苦勞様でした。改めて、劇団長の佐々木さんを始め各関係者の皆様には感謝いたします。そして演劇の素晴らしさや演じる難しさをしみじみ味わった次第です。

感謝！感謝！



チームけせんの和 第4回研修会 職種別検討会

検討会「患者・利用者を支える医療介護の連携を探る」 平成28年10月20日(木) 44名参加

事前アンケートで各事業所の皆様から寄せられた課題や意見をもとに、これからの連携を深めるための方策について職種別にグループで検討しました。職種別の検討会は共有の課題が見えて発言もしやすく、大いに盛り上がりました。各グループの発表後には、活発に質疑応答もなされ同職種だけの話し合いの後には、解決策も提案されて一歩前進した感がありました。その後の懇親会も顔の見え関係作りで大いに盛り上がりました。



医療

現在の課題

・入院、退院、緊急時も安心してスムーズに連携できる体制。(病院、施設、在宅)

★ほっとつばきについて

- ・ほっとつばきや活用法が広く知られていない。
- ・県立高田病院としては病状経過を知らないで受け入れることが難しい(6ヶ月毎に病院から患者さん連絡し診察の必要がある)
- ・県立高田病院が他の病院の患者さんを登録できない→他の病院の訪問診療を安心して利用出来ない。
- ・何かあった時の対応は確実にしておく必要がある。
- ・消防署がほっとつばきの存在を知らない。
- ・24時間の医療体制がない。
- ・急変時などの対応を家族がどう対応するか理解が難しい。
- ・医師不足(その他看護・介護職なども)
- ・レントゲン・検査室が稼働していない状況。

課題を解決するために必要なこと

- ・県立高田病院以外の病院が安心して訪問診療が出来るように整えるとよい。
- ・病状経過がわかっていればほっとつばきに登録しやすい。
- ・消防署がほっとつばきを知ることですつながる事があるのではないかと。
- ・レスパイトケアとして入院してもらう形がよいのでは(緊急時・医療依存度が高い人)→介護サービスではキャパシティと出来ることに限られている。

連携するために他の職種に期待すること



- ・患者さん：社会参加を大切にしてほしい
- ・ケアマネージャー：担当者会議に医師を巻きこむ工夫をしてほしい
- ・看護師：家族や本人を巻きこむ支援を行ってほしい
- ・介護：人員不足はヘルパーになる方法の周知も必要ではないかと
- ・薬剤師：お薬手帳を情報共有のツールにしたい

看護

現在の課題

・在宅での看取りをかなえるためには。



課題を解決するために必要なこと

- ・夜間も(24h)連絡がつくように訪問看護と連携する。
- ・家族での看取りで医師の説明を理解できていない部分は、看護師が患者さんの看護と共に、家族の不安に対しても繰り返し丁寧に対応していく。
- ・患者さんを中心とした全ての職種(医師・看護師・ケアマネージャー・薬剤師・リハビリ等)と情報を共有する。

連携するために他の職種に期待すること

- ・他職種連携と情報の共有
- ★具体例 二又診療所の実践例 <やまぼうしノート>
 - ・基本情報：患者さんの基礎情報(病歴等) 家族情報(連絡先等) ケアマネージャーや利用サービス情報 訪問看護等の訪問歴
 - ・病状情報：(3枚綴りで2枚複写の書式) 病状・検査・処置・医師コメント等
 →家族に渡しておいて急変時医療機関に持参してもらう

ケアマネージャー

現在の課題

- ・サービス担当者会議の効果的な開催が難しい。
- ・主治医から意見を聞くには医師によってハードルが高い。
- ・介護保険の適切な申請のタイミングや区分変更の意味が十分理解されていない。
- ・事業所サービスが不足(特に西部地区)しており、利用者の希望ではなく空きに合わせたサービス提供になってしまおう。

課題を解決するために必要なこと

- ・紹介文書の活用。
- ・意見書作成のための受診に同行する。(医師の意見を聞く場になる)
- ・認定調査時に家族の意見を再確認することで、サービス事業所へフィードバックできる。
- ・サービス事業所のスタッフもチームけせんの和の研修会に参加してもらい問題を共有化する。
- ・チームけせんの和の事務局がサービス事業所に出向いて困りごとや現状を把握してみてはどうか。

連携するために他の職種に期待すること

- ・プランの支援内容について「こうしてほしい」という事を共有し実施され、結果も助言してほしい。
- ・プラン作成時と現状の変化を事業所の介護計画等でフィードバックしてもらえるとプランの見直しがしやすい(訪問リハビリからはフィードバックがあり助けられている)
- ・区分変更は介護度が高くなることで料金等のデメリットもあり、サービスの量によっては現状の介護度で大丈夫なこともあるのでケアマネージャーに相談してほしい。



薬剤

現在の課題

- ・薬局に居る薬剤師は、処方された薬がきちんと服用されているか、副作用が出ていないか等の状況を把握することが難しい。
- ・どんな人達が関わっているか全体像が見えない。
- ・介護保険を利用した居宅療養指導を行うのに一歩遅れたスタートとなり、同意書のタイミングが難しい(お金がかかるため理解が必要)
- ・薬に関することを何でも連絡してもらえたり、訪問して何ができるか等の理解が不十分。



課題を解決するために必要なこと

- ・患者さんのコンプライアンスや症状の推移、残薬数などは、投薬時のみでは聞き取りが十分に行えないこともあるため、介護職の方々など、直接患者さんに触れ合う機会のある方々からも情報を収集できると、より詳細に状況が把握できる。
- ・お薬手帳に関わっている人が全て名刺をはさむなど連絡先を明記する。
- ・最初にケアマネージャーと同行訪問をするとスムーズに利用につながる。
- ・薬剤師側から出来ることをアピールしていくことが必要。
- ・お薬手帳に過去の副作用情報を記入し活用していく。

連携するために他の職種に期待すること

- ・介護職の方々(ケアマネージャー、ヘルパー等)から、生活面の変化や服薬状況を、薬剤師に情報提供していただきたい。
- ・お薬手帳に各スタッフの連絡先を記入してもらい、同行訪問の打ち合わせ等を行う。
- ・薬剤師とケアマネージャーの連携強化(報告書やノート等に経過記入し共有する)
- ・介護職
 - ・過去の副作用状況、薬や症状に対する疑問点、不安なところ、症状経過など、なんでもいので医療者側に伝えたいことをお薬手帳に直接書き込んでほしい。
- ・気になることがあれば、気軽に薬局に連絡してほしい。

リハビリテーション

現在の課題

・自立支援に向けて、通所リハビリや施設サービス等と連携していくためには。



介護

課題を解決するために必要なこと

- ・利用者に合わせて外出しやすいような環境作りをし、環境調整をしていく（サンプル等を作って試す）
- ・お互いの職種についてお互いの理解を高める。
- ・広い視点を持ち、コミュニティー作りや外に出るための目的作りをする。

連携するために他の職種に期待すること

- ・環境整備を行って終わるではなく、フォローや定期的なモニタリングもしてほしい。
- ・環境整備を他職種にも報告し、使用方法の説明もしてほしい。
- ・その人のために何ができるかを共に考えていく。
- ・コミュニティー作りをするためには、環境作りの際にいるような場所でそれぞれの専門職が発言していく。

現在の課題

・自立支援の視点を持ち介護度の改善を目指した介護とは。

★職員の人材不足

・グループホームは2ヶ所、西部地区のディサービスの休止、小規模多機能のサテライトの予定など問題が深刻化している。

・介護度が下がっても家族からの不満がでたり、在宅に戻れない現実もある。

課題を解決するために必要なこと

- ・身体介護以外にも運転手や補助的な仕事もあるので、資格がなくても段階を踏んだ仕事ができることをアピールする。
- ・高齢者の中で社会参加をしたい人や働きたい人を募り、どうしたら働けるかを具体的に伝える。
- ・介護の仕事の楽しさや働きやすい環境等良い所もアピールする。
- ・状況の発信も必要ではないか。
- ・在宅に向けては家族状況の影響が大きいのので理解協力を得ていく。

連携するために他の職種に期待すること

- ・移住者の住まいの確保等行政の力が必要。
- ・社協等の職場体験を活用する（事業活用、制度紹介も必要か）
- ・生活保護の方が就業に繋がるよう行政と連携して行く。
- ・ハローワークに順調に働いている状況も伝えてもらう。



講評

- ・医師 → 医療間での連携を深める必要があるが、誰が中心になるかがポイントだと思う。
- ・看護師 → 看取りはコミュニケーションが大事だと言う事。
本人や家族は医師に言えなくても看護師に言える事もあり、看護師の役割に期待したい。
家族が本音を言える看護師になってほしい。
- ・ケアマネジャー → 要となる担当者会議は、ケアマネがもっとワンマンになって訪問診療を活用したり、外来診察の前にリハビリや薬剤師をつれて会議を開催したり等工夫すれば医師に対してどうにか開催に結びつくと思う。
- ・リハビリ → 社会参加の重要性を再認識してほしい。寝たきりの人への訪問も社会参加になるし、誰かと訪問すれば訪問サロンとなる。
- ・薬剤師 → お薬手帳の活用はとても有効と思われる。現在ボランティアではあるが週1回の薬剤師の訪問や1週間毎の処方をしてもらうことで落ち着いている人もいる。
- ・介護 → 介護職員の不足に対しては、高齢者の中で社会参加をしたい人を募って、どうしたら働けるか具体的に伝えることや、行政の力が必要と思われる。

チームけせんの和 活動報告

平成28年12月2日(金)

平成28年度 第6回研修会 (54名参加)

テーマ : 「在宅療養における口腔ケア」 ～口を通して人を支える～

講師 : 岩手県立中部病院 地域医療福祉連携室歯科衛生士

赤坂幾子先生

念願だった赤坂先生の在宅療養における口腔ケアの講演会は、目からウロコの連続でした。栄養の入り口の口腔の機能の重要性を説き、その機能を温存することが、健康な生活の維持に必要なだというお話でした。特に栄養低下が危惧される高齢者や手術前やがん治療前の患者さんについて、日ごろから関わる人たちが口腔の観察を行い、必要に応じて専門家（歯科医師や歯科衛生士）につなぐシステムの構築が重要だと話されました。日ごろの観察は、口腔内の保清や歯や義歯の状態、しっかり噛める口腔かどうか、口臭など多岐に渡りますが、とにかく観察することが大事です。機能温存のための日ごろの体操にまで言及され、実りある研修会となりました。



「玉の湯デイサービスセンター」について

玉の湯デイサービスセンター
及川裕喜

「訪問リハビリステーションさんば」でお馴染みのロツツ株式会社ですが、陸前高田の皆様の更なる健康に貢献したいとの思いから、昨年の12月より「玉の湯デイサービスセンター」をオープンいたしました。

当施設は従来のデイサービスとは異なり、半日利用で、食事・入浴がなく、理学療法士・作業療法士が個別・集団でのリハビリを行うリハビリに特化したデイサービスとなっております。そのため、退院後にリハビリを継続したい方や、運動を行い症状の改善や予防をしたい方に適した施設となっております。

また、今後は春に完成予定の大型商業施設内にもリハビリ特化型デイサービスを開設する予定になっております。デイの機器を一般の方にも提供したり、ヨガやピラティスなどの運動教室を開催したりするなど、障害の有無や、老若男女問わず高田の皆様が健康になれる施設を作っていきたいと思っております。今後も、さんば共々ロツツ株式会社の活躍にご期待ください。



平成 28 年 11 月 12 日 (土)

平成 28 年度 第 5 回研修会 (27 名参加)

テーマ : 「摂食嚥下リハビリテーション」～『口から食べる』を守る～

講師 : 日本大学松戸歯学部障害者歯科学講座

地主 知世先生

口から食べることは、生きて行くための手段だけでなく、家庭や友人とのコミュニケーションの場であり、QOL (生活の質) の向上のためには欠かせないものである。高齢者や障害のある人が安全に美味しく楽しく食事をするための食事環境のポイントや注意点、また手軽に行えるリハビリについて判りやすく説明していただきました。



編集後記

穏やかなお正月が過ぎて、寒さ厳しい2月に突入しました。節分が過ぎても氷上山がすっかりと白くなることはまだなく、雪不足による何らかの障害が起きることがないことを祈るのみです。先日、諏訪中央病院名誉院長・鎌田實先生のお話を聞く機会に恵まれました。「近所のお嫁さんが介護で苦勞しているなと思ったら『よくやっているね。あんたがいるからじいちゃん幸せだね。』と言ってもらえることでお嫁さんはホッとしますよ。ここを元気にしてもらうことが大事なんです。」というものでした。とかく私たちは、何か行動を通して応援してあげなくっちゃと思いがちですが、ひと言の声掛けが大事だということをしみじみ感じ入りました。今年も皆さんよろしくお願ひいたします。

※この会報は、市からの補助金で作成しました。